

【研究ノート】

プロテスタンティズムの倫理と アメリカ資本主義に関する覚え書き

浜 文章

目 次

はじめに

I マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

II 大塚久雄「マックス・ヴェーバーにおける資本主義の『精神』」

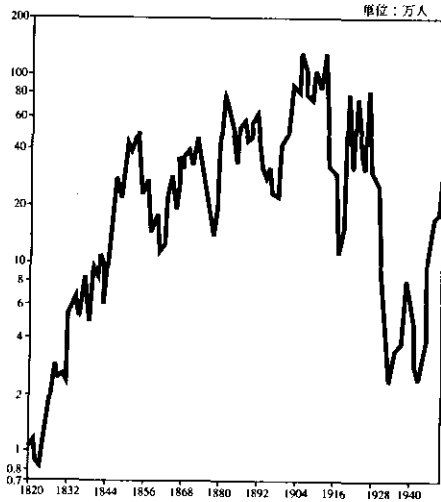
おわりに

はじめに

「移民の国」といわれるアメリカの19世紀は、「ボロから富へ」という、現在では神話となってしまったことが実現し得た時代であった。旧くは第7代大統領アンドリュー・ジャクソンに「アメリカ製造業の父 (the Father of American Manufactures)」と賞賛されたサミュエル・スレーター⁽¹⁾や、今世紀初頭の鉄鋼王として有名なアンドリュー・カーネギー⁽²⁾なども移民としてアメリカにやってきて、一代で財を成し、歴史に名を残す押しも押されもせぬ企業家となったことは良く知られているところである。またこのような事実が存在したことによって、アメリカは「希望の地」であり「自由の国」であるという評判が高まり、こうした評判やイメージに引き付けられて多くの移民がアメリカにやってきたのである。しかしながら、アメリカにやってきたすべての人間が成功して階級ラダーを一気に上昇して、「ボロから富へ」を現実のものとしたわけではない。神話を現実のものとし得たのは移民の中でも一握りの人々であった⁽³⁾。

移民が急増し始めた19世紀初頭(図1参照)のアメリカは、まさに産業革命が進行していた時期であった。アメリカに多数流入したこの時

図 1 移民数の変動 (1820~1950 年)



出典：D. C. North, *Growth and Welfare in the American Past*, New Jersey, 1966, p.26.

期の移民は、通説的には、産業革命期の労働力を補完したとされている⁽⁵⁾。これらの移民の多くは、ヨーロッパの原始的蓄積の所産としてヨーロッパから排出されたものであり、19世紀後半以降になるとそのほとんどが工業労働者とならざるを得なかったのである。19世紀を通して見た場合、移民からは労働者のみならず資本家として成功した者も輩出され、移民はアメリカ資本主義の発展を支えたといえることができるであろう。ところで、18世紀および19世紀のアメリカにおける資本主義の生成と発展を語るときに必ず言及されるのが、マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において展開された、かの有名なテーゼである⁽⁶⁾。ヴェーバー・テーゼはごく簡単に整理すれば次のように理解されていると考えてよいであろう。

ヴェーバーは、近代資本主義の特質は、非合理的な利潤獲得を目的とする賤民資本主義 (Paria-Kapitalismus) とは全く異なり、正当な利潤を合理的に追求するという合理的経営資本主義であると考えた。そし

てその心理的起動力＝資本主義の精神，すなわち勤労や節約といった市民的性情倫理は、「あたかも労働が絶対的な自己目的＝天職 Beruf であるかのように励むという心情」であり，そうした天職倫理は，カトリック的な禁欲＝世俗外的禁欲ではなくて，プロテスタント的禁欲の精神，すなわちプロテスタントの世俗内的禁欲の精神から生まれたのであり，さらにこうした心情は，興隆しつつある中産階級の中にのみ見い出されるものであり，彼らを内面から押し進めたのがまさにプロテスタンティズムの倫理であった。このような性情倫理を内的起動力として持ち合わせた中産階級は，近代西ヨーロッパおよびアメリカ合衆国にしか見い出されない，というものである。

ヴェーバーは近代資本主義の発生地のひとつとしてアメリカをあげている。ところで，アメリカについての日本における資本主義発生史の研究史を振り返ってみると，ニューイングランドが産業革命の揺籃の地となり，そこから資本主義的發展が拡大していったと考えられている。たしかに，ニューイングランドでは，初期には著しいピューリタニズムの發展が見られ，19世紀の初頭まで，とくにニューイングランドに限って言えば，アメリカは「純粋培養」⁽⁷⁾的あるいは「典型に近い」⁽⁸⁾形で資本主義が發展していったと言って良いであろう。しかしながら，産業革命が本格的に展開し始める19世紀初頭以降，「純粋培養」的ではない，あるいは「典型」とはいえないような部分を考慮に入れなければならないであろう。すなわちそれは，先述したような補完労働力としてのアイルランド人移民などの存在を考慮に入れる必要があるという点である。アイルランド人移民はそのほとんどがカトリックであることを考えると，ヴェーバーが考えたピューリタニズムの体现者という対象には含まれないであろうが，19世紀の40年代以後急速にアイルランド人移民数が増加し，そのほとんどが綿工業労働力として，当時急速に發展しつつあった綿工場に吸収され，その工場制の發展を支えたのである。そうした部分が持つ歴史的意味について明らかにしなければ，ヴェーバーが示した資本主義の精神を担う資本家・労働者という二つの構成要素を含む全体像を明らかにすることにはならず，それゆえ，アメリカにおける資本主義の發展の担い手についても明らかにし得ないのではないかと思われるのである。というのも，ヴェーバーは，資本主義の精神の担い手として

は資本家ばかりではなく、労働者もその中に含まれるという点を強調しているからである。⁽⁹⁾また、従来の「資本主義の精神」起源論論争の中では、資本家の資本主義の精神にウェイトがおかれ、労働者の資本主義の精神が実証的に明らかにされてこなかったように思われるからである。

そこで本稿では、こうした問題関心の下に、まずヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』をアメリカに関する記述にも注意を払いながらその論理の流れを整理しておくことにしたい。またそれと並んで、ヴェーバーの理論を基礎にそれを自己の論理の中に取り込み、独自の理論を構築し、日本での中心的論者の一人となった大塚久雄氏の「マックス・ヴェーバーにおける資本主義の『精神』」を中心にアメリカに関連して述べられた部分の記述にも注意を払いながらその理解の仕方を整理し、若干の疑問点を提示しておくことにしたい。

I M・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

ヴェーバーは、まず職業統計・信仰統計およびそれらについての研究などから、「近代経済における資本所有と経営的地位を今日プロテスタントたちがより多く占めているという事実」⁽¹⁰⁾が見いだされることを示した上で、これはカトリックに比べてプロテスタントが「経済的合理主義への愛着」⁽¹¹⁾を強く示しており、プロテスタンティズムとの宗教的因果関係がきわめて強いこと、そしてカトリックとのこうした著しい相違の原因は、「信仰の恒久的な内面的特質の中に求められるべき」⁽¹²⁾であるとして、「近代経済の基調」⁽¹³⁾である経済的合理主義とプロテスタンティズムとの宗教的因果関係⁽¹⁴⁾を明らかにすることを問題として設定する。そうした問題設定に続いて、「近代資本主義の精神」を「ほとんど古典的と言いうるほど純粋に包含している」⁽¹⁵⁾ものとしてフランクリンの小冊子を、単なる処世術ではなく独自の『倫理』、すなわち、エートスが表明されているものとして取り上げる。これはフッガーなどの「金銭欲への衝動にかられて一切をなげうった連中」⁽¹⁷⁾が持っていた精神、すなわち伝統主義的精神とは全く異質なものであり、こうした伝統主義を打ち破る精神はどこから生まれたのか。「どのような思想世界にその源泉をもったの

だろうか。」⁽¹⁸⁾「いったいどんな精神的系譜に連なるものだったのか」と問い、その起源を宗教改革後のマルティン・ルターの聖書翻訳によってもたらされた⁽²⁰⁾天職観念 Beruf, Calling に求める。ルターの聖書翻訳の中に現れた職業を意味する Beruf, Calling には、もう一つ重要な「神から与えられた使命という観念」⁽²¹⁾が含まれていたことを明らかにする。これはルター後の、宗教改革後の最大の影響の一つであった。「神によるこぼれる生活を営むための手段はただ一つ、各人の生活上の地位から生じる世俗内的義務の遂行であって、これこそが神から与えられた『召命』《Beruf》にほかならぬ⁽²²⁾」という、世俗的職業労働こそ召命にもとづく使命なのだという、ルターによって生み出された天職観念に他ならなかったのである。ルターは、修道院にみられるような生活を現世の義務から逃れようとする利己的な産物であり、それどころか世俗の職業労働こそ隣人愛の外的な現れだと考えたが、彼の天職概念は伝統主義を脱することはなく、「ルターは、結局、宗教的原理と職業労働との結合を根本的に新しいあるいは何らかの原理的な基礎のうえに打ち立てるにはいたらなかった。」⁽²³⁾のであり、「職業労働は〔天職として〕神から与えられた使命、否むしろ使命そのものだとする彼のいま一つの思想は色あせてしまった。」⁽²⁴⁾のである。そこで章を改め、ヴェーバーは世俗内的禁欲の宗教的諸基盤として、そうした天職概念の起源はどこにあるのかのという点についての分析へと進む。

禁欲的プロテスタンティズムの担い手には四つのものがあり、敬虔派・メソジスト派・再洗礼派があげられているが、ヴェーバーは中でもカルヴィニズムの予定説に注目する。⁽²⁵⁾「人間の一部分が救われ、残余のものは永遠に滅亡の状態に止まる」という、救われる者と救われない者とはあらかじめ神によって定められているというカルヴァンの予定説によって、世界は初めて呪術から解放されたのであり、これこそがカトリシズムと異なる決定的な点であった。⁽²⁷⁾こうした予定説を信じる者は、教会や聖礼典によっては何らの救いも得られない如何ともしがたい内面的孤立化の感情を抱くことになり、これがかえって個人を内面から解放しようとする自己の救済に向かう契機となったのである。⁽²⁸⁾「選ばれたキリスト者が生存しているのは、それぞれの持ち場にあつて神の誠めを実行し、それによって現世において神の栄光を増すためであり」、「カルヴァ

ン派信徒が現世においておこなう社会的な労働は、ひたすら《「神の栄光を増すため」》におこなわれ、「現世で人々全体の生活のために役立つとする職業労働もまたこのような性格をもつことになる。⁽²⁹⁾」のである。ところでこうした考え方は、一般の信徒にとって、救われる対象に選ばれているか否かという疑問を生ずることとなる。こうした疑問に対しては、「救いの確証」⁽³⁰⁾がどうしても必要であった。これに対して、カルヴァン派にあっては、「自己確信を獲得するためのもっともすぐれた方法として、絶え間ない職業労働をきびしく教えこむことだった。つまり、職業労働によってのみ宗教上の疑惑は追放され、救われているとの確証が与えられる」⁽³¹⁾ことになるのである。ヴェーバーはピューリタニズムの天職理念の宗教的基盤をカルヴァン派の考察によって示した後、諸教派の考察に移るのである。⁽³³⁾

諸教派の考察をおこなった後、節を改め、天職理念が「営利生活に及ぼした影響を究明」⁽³⁴⁾するために、天職理念のもっとも首尾一貫した基礎づけを示しているピューリタニズムの代表的信徒の一人としてリチャード・バクスターをあげ、その著作を考察の対象とする。そして、ヴェーバーはこの考察を通して次のように総括する。「プロテスタンティズムの世俗内的禁欲は、所有物の無頓着な享楽に全力をあげて反対し、消費を、とりわけ奢侈的な消費を圧殺した。その反面、この禁欲は心理的効果として財の獲得を伝統主義的倫理の障害から解放させた。利潤の追求を合法化したばかりでなく、それをまさしく神の意志に添うもの⁽³⁵⁾と考へて、そうした伝統主義の桎梏を破砕してしまったのだ。」と。そしてまた次のようにも述べている。「たゆみない不断の組織的な世俗的職業労働を、およそ最高の禁欲的手段として、宗教的に尊重することは、われわれがいままで資本主義の『精神』とよんできたあの人生観の蔓延にとってこの上もなく強力な槓杆とならずにはいなかったのだ。そしてときに述べた消費の圧殺とこうした営利の解放とを一つに結びつけてみるならば、その外面的結果はおのずから明らかとなる。すなわち、禁欲的節約強制による資本形成がそれだ。利得したものの消費的使用を阻止することは、まさしく、その生産的利用を、つまりは投下資本としての使用を促さずにはいなかった。⁽³⁶⁾」のであると。

以上、ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精

神』の叙述の概略を追ってきた。ここで、ヴェーバーのこうした考え方をアメリカにおける資本主義の精神の成立に当てはめて考えた場合どのように考えられるか、若干の疑問点を述べておくことにしたい。ヴェーバーは、プロテスタンティズムの倫理は資本主義の精神として西ヨーロッパのみならず、北アメリカにも強く作用したと⁽³⁷⁾考えていた。しかしながら、ヴェーバーが対象としていたアメリカの時期と地域は、いつ頃のどの地域であると考えればよいであろうか。時期的には18世紀中葉前後以後と⁽³⁸⁾考えてよいであろう。またその地域もアメリカの全ての植民地が対象となっていたわけではなく、ニューイングランドのみを対象と見なしていたのは明らかであろう。しかしながら、ニューイングランド以外の北アメリカの他の植民地、特に中部植民地や南部植民地も含めて北アメリカ全体の資本主義の成立と発展、すなわち一国における資本主義の成立を考える場合、全くその構造を異にする三つの地帯構造を持った植民地⁽⁴⁰⁾の対抗構造の中における資本主義の発展（ニューイングランドにおける資本主義の成立が如何にして他の植民地との対抗関係の中で発展していったか、あるいはニューイングランドのみの独自の発展として考えるのか）として見るとどのようなことになるかと考えていたのであるか。また、各植民地内部での異なる資本類型を持った資本間の対立および異なる地帯構造を持った地域間の対立という重層的かつ錯綜的な対抗関係をどのように考えればよいであろうか。この問題は焦点を絞った別の問題、すなわち資本主義形成において主体を担ったのは如何なる社会階層かという、⁽⁴¹⁾経済史あるいは経営史上の問題として長きにわたって議論されてきている未だ結論を見ていない、両論が並立しているきわめて大きな問題でもある。これは方法論上の世界観の問題であり、決着の付けられない問題であり結論の出せない問題であるということになるのであろうか。

また、もう一つの疑問点は、ヴェーバーが抱いていた近代的労働者観（すなわち、ヴェーバーの言う意味での資本主義の精神を持ち合わせた労働者）である。ヴェーバーは後段で、資本主義の精神は、企業家や資本家ばかりでなく、労働者にも必要とされ、また、形成期の資本主義そのものも、こうした資本主義の精神を持ち合わせた労働者を必要とするのである、と⁽⁴²⁾述べている。たしかに資本主義の形成期にはこうした労働

者が存在することが必要であろう。しかも、そうした理念を持った労働者が「大量現象」⁽⁴³⁾として見い出されることが必要であろう。しかし、それがもし見い出されないとすれば、ヴェーバーが主張する資本主義の精神の体现者は資本家あるいは企業家のみであるということになり、ヴェーバーが批判の対象としてあげているソンバルトやブレンターノ(ヴェーバーは誤読であると批判している)⁽⁴⁴⁾の主張が正しいということになるのであろうか。ヴェーバーの言うような、主体的に「良心のために経済的搾取にも甘んじようとする、そうした労働者」⁽⁴⁵⁾が、アメリカに限っていえば、果たして現実に存在し得たか否か疑問が生ずるのである。⁽⁴⁶⁾

II 大塚久雄「マックス・ヴェーバーにおける資本主義の『精神』」

大塚氏は本稿でまず、ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で提起した問題が議論を呼び、「資本主義精神起源論論争」⁽⁴⁷⁾の姿をとり、経済史研究の観点から現れた諸論稿はさながらヴェーバー批判史を形成していると言つて過言ではないであろうとし、しかも否定的批判を加えた諸論稿相互の間には「基本的に共通の立場をあきらかに看取しうる」⁽⁴⁸⁾として、そうした立場の原型を打ち出したものとしてルヨ・ブレンターノの論稿を取り上げ、問題の所在がどこにあるかを明らかにする。

まず大塚氏は、ヴェーバー・ブレンターノ両者の使用している基本的諸概念の意味内容および両者が追求している『問題』そのものが全面的に背馳ないし乖離しているその一例として述語の相違をあげている。⁽⁴⁹⁾そして次に基本的概念の相違を明らかにするために、「ほとんど全面的にブレンターノに賛意を表しており」、「重要なイギリス近代史について、もっとも包括的かつ豊富な史実にもとづいてなされた業績である」⁽⁵⁰⁾トーニーの『宗教と資本主義の興隆』をとりあげ、ブレンターノ＝トーニー的見解を次の四点に整理している。⁽⁵¹⁾重要な点であるので煩を厭わず引用しておきたい。

- (1) 「ヴェーバーは『利潤』pecuniary gain, Gewinnに向かつてひたむきに専念するような心的態度を『資本主義精神』capitalist

spirit, kapitalistischer Geist, spiritus capitalisticus (この語は『資本家精神』とも訳しうる)と呼び、それを生み出したものはカルヴィニズムの社会倫理であったとした。」

(2) 「しかし、すでに宗教改革以前から、なかでも 15 世紀の北イタリア諸都市などでは商業や金融のいちじるしい発達を基盤に、早くも資本主義的企業が現れており、それに照応してこうした『資本主義精神』が広がっていた。この事実からも分かるように、『資本主義の精神』の誕生には、明らかに、カルヴィニズム以外の諸要因が大いに関与している。その一つは、経済上の諸変動、とりわけ地理上の発見の結果巨姿をあらわしてくる商業の発達。その二つは、これと手を携えてすすむ精神上の諸変化、すなわち、ルネサンスの政治・経済思想。ところが、ヴェーバーはそれらをほとんど無視した。」

(3) (前段省略) 「すなわち、後期のピュウリタニズムがすでに『資本主義精神』と結びつきうるものになっていたのに対比して、初期のカルヴィニズム(ピュウリタニズムも含めて)は、逆に、それと峻しく対立するような性格のものであった。このようなピュウリタニズム自体の性格の著しい変化が、いったい、どういう原因によってもたらされたかを問うことこそが問題であるのに、ヴェーバーはそれを無視している。」

(4) 「要するに、『プロテスタントの倫理』も『資本主義の精神』もともに、ヴェーバーが考えているよりもはるかに複雑であるにもかかわらず、それらを過度に単純化したために、彼は一面的で偏頗な抽象と、具体的な事実からの不当な遊離におちいつてしまったのだ、と。」

以上のようにブレンターノ批判の要点を整理し、そのそれぞれについて反批判が展開される。以下でそれを見ていくことにしたい。

まず第一の点で、ブレンターノが言うところの『資本主義精神』Kapitalistischer Geist の原語が『資本家精神』とも邦訳しうることから、その担い手 Träger は、もっぱら『資本家』Kapitalisten あるいは資本主義的『企業家』Unternehmer, entrepreneurs であって、『賃金労働者』Lohnarbeiter 層は『資本主義精神』の担い手ではないというこ

とになる。しかしこれは、「『資本家』(企業家)層と『賃金労働者』層、すなわち、近代経済社会の基幹部分をなす二つの社会層のどちらもが抱いている——さらに歴史的に見れば、この両者を生みおとす共通の母胎であった『産業的中産身分者層』gewerblicher Mittelstandがまた早くも抱いていた——共通の心的態度を示していたのである。」としてプレントナー⁽⁵²⁾の理解を退けている。

そして次にプレントナーのいう『資本主義精神』とヴェーバーの『資本主義の精神』の意味内容の相違についての検討へと移っていく。前述した相違ともきわめて密接な関連を有するが、その第一は、『資本主義の精神』という語でもって表現しようとした内容、すなわち、営利心の中には資本家(ないし企業家)の営利心ばかりでなく、『賃金に対する『賃金労働者』の営利心——正確には『賃金とその額を打算するきびしい経済性』——をもそのうちに含んでいる⁽⁵³⁾』という点である。もう一つの点は、ヴェーバーの言う『資本主義の精神』は営利心を含むものではあっても単なる営利欲ではなく、『倫理的な色彩をもつ生活の原則という性格』Charakter einer *ethisch* gefärbten Maxime der Lebensführungをおびるにいたったような、そのような特有な『エートス』こそがヴェーバーのいう『資本主義の精神』にほかならないのである』と述べて、プレントナーおよび彼の側に立つヴェーバー批判者の見解を退けている⁽⁵⁴⁾。次に、中世と現代の資本主義の精神に関して「循環論法の誤謬を犯している」というプレントナーのヴェーバー批判に対しては、中世の資本主義(ヴェーバーは資本主義と呼んでいる)は、非合理的な商業的=金融的資本主義であって近代に独自の資本主義ではないし、「産業革命以後の成熟した資本主義とその企業家に適合的で、したがって彼らを担い手とするような精神だとは考えられていない⁽⁵⁵⁾。」のであるとして、この点でもプレントナーの理解は退けられている。

プレントナーとヴェーバーの理解の相違をこのように明らかにした上で、ヴェーバーの『資本主義の精神』を「意識の明らみに引き出す『例証』として、ヴェーバーも用いたフランクリンの著作の検討を通して両者の相違が更に明らかにされている。また、大塚氏は、ヴェーバーが引用しなかったフランクリンの著作の中から『勤労』industry、『質素』frugality、『周到』prudenceなどの具体的徳目を示して、ヴェー

バーの『資本主義の精神』は「少なくとも、そのような禁欲的諸徳性の実践を本質的な構造的契機として自己のうちに包含するような『エートス』として……理解されているということ、をはっきりとさせておかなければならない。」と述べている。⁽⁵⁶⁾この点と関連して、こうした徳目は「営業のための道徳」（「ゾンバルトの表現を借りれば」）ではなく、「道徳のための営業」であって、この点についてもゾンバルトは誤謬を犯している⁽⁵⁷⁾と批判されている。

次に大塚氏は、ヴェーバーにあっては「資本主義の精神」が独自のエートスとして捉えられていることで事足りるとされているわけではなく、「営利」が倫理的義務ないし最高善となっているという規定にもヴェーバーが力点をおいているとして、「営利」と「倫理」との関係を、「どのような関連の仕方と構造的に結びついているのであろうか。」と問題を設定して、ヴェーバーが触れなかったフランクリンの《The Way to Wealth》を資料として用いて、次のようにまとめている。ヴェーバーのいう『資本主義の精神』は「『営利』がただそれ自体として最高善と考えられているなどといった事態を、意味してはいない。むしろ、その禁欲的な倫理的雰囲気のうちにあつては、およそ『慾』——感性的欲求の満足——の形をとるものは『営利』という姿においてさえ、全く存在の余地を見いださぬ……そうではなくて、ヴェーバーのいう『資本主義の精神』においては、……禁欲的倫理が『営利』の実践を媒介しつつ、みずからの価値を実現するのである。逆にいえば、『営利』活動はそうした禁欲的諸徳目の実践によって媒介されつつ行われ、そのかぎりにおいて、『営利』のための個人の努力は彼の道徳的完成への努力と完全に重なりあい、こうして、『営利』は『倫理的色彩をもつ生活の原則という性格を帯び』て、勝れた意味で自己目的となっているのである」と。⁽⁵⁸⁾

そして最後の「生産倫理としての資本主義の『精神』」の節で氏は、『資本主義の精神』が担い手の中では主観的には「倫理」と「営利」が両全されていると意識されているとしても、客観的に見た場合、すなわち歴史的現実をみた場合、「『営利』に『倫理』が仕えているというのが、むしろ事態の真相ではなからうか」と問題を提起し、さらに、「倫理的実践と『営利』活動が内面的に相互に媒介しあっていることの意味を、

「客観的に見た場合、羽ばたきしつつある近代資本主義という現実の利害状況の中で機能する『資本主義の精神』においては、『倫理』と『営利』は、はたして、実際に両者が等しい比重を与えられつつ両全されていたなどというるのであろうか⁽⁵⁹⁾」として、なかでも「『資本主義の精神』に照応する経済的利害状況の特質と、その中における『資本主義の精神』の作用の仕方」を問題にしていく。

『資本主義の精神』においては、「倫理」と「営利」が相互に媒介し合いながら、しかもその精神的根幹はしだいに、「倫理」の実践が「営利」活動を媒介しつつ遂行されるという、いわば倒錯的な事態へと重心を移動させ、そこに独自の価値の倒錯が出現してくることになるのである。こうして宗教的観点からすれば「プロテスタンティズムの倫理」とはおよそ異質なものが現れるのである。それゆえ、ブレンターノは「営利自体の最高善化」という事実のみを指摘するに止まっていると批判されることになるのである。

そして最後に大塚氏は、ブレンターノ・ヴェーバーの「資本主義の精神」における理念上の相違のみならず、それに照応する利害状況について、近代資本主義の歴史的な性格把握についても大きな相違があることを明らかにしている。その相違は、ブレンターノが商人資本の発展が近代資本主義を発生させたことと捉えているのに対して、ヴェーバーは「産業的中産者層」の分解によって近代資本主義は発生してきたものであると捉えている点である。この相違を明らかにした上で、氏は、ヴェーバーがブレンターノのいう自己目的化した営利欲としての「資本主義精神」と俊別して、「資本主義の精神」という独自の概念構成をとくに行なわねばならなかったことの現実的意味を明らかにすることに向かう⁽⁶¹⁾。そして氏は、独自の禁欲的エートスの性格は、職業倫理であり、「この『職業倫理』が、すぐれて『産業的中産者層』を担い手とし、その生産事情や経済的利害状況に密着しつつ、すぐれた意味で『生産倫理』として現れ、『産業的中産者層』を内面から押し動かして近代産業建設の中心的担い手たらしめたということ、つまり、それがヴェーバー風にいえば、近代産業の形成ともっとも適合的な関連にたつエートスであったということ、この事実こそがその焦点」であるとまとめられている⁽⁶²⁾。

ところで大塚氏の用語によれば、中産的生産者層の両極分解の中から

近代資本主義が出現しそしてその中産的生産者層こそヴェーバーのいうエートスの体現者であるという事になるが、このエートスは両極分解が起こった直後にも、資本家と労働者に分解した双方に保持されると言うことになるのであろうか。また、その双方が、倒錯した価値を認めあうという事でなければならないが、労働者にとって資本家の貨幣利得の増大を容認することは、自らの貨幣利得の増大にとって障害になる、すなわち、賃金の引き下げを容認するということになるのではないであろうか。さらに、低賃金の強制力は働くことはないのであろうか、これらの点は疑問の残る点である。

おわりに

以上、マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と大塚久雄「マックス・ヴェーバーにおける資本主義の『精神』」のそれぞれの叙述に即して、アメリカにおける資本主義の成立との関連を念頭に入れながら検討してきたが、大塚氏が指摘されているような誤読や誤解にもとづく批判が多くなされてきた点は十分理解できた。そうした批判は論外としても、どうしても気にかかるのが労働者の営利心、すなわち労働者層の資本主義の精神の問題である。資本主義精神起源論論争のなかで言及されてきてはいても、歴史的実態（もちろん、各国によってそれは異なるであろう）が十分に明らかにされていないように思われるのである。ヴェーバーも随所で述べているように、資本主義のエートスの担い手は資本家だけではなく、労働者についてもそれが求められているのである。つまり、労働者も勤労の倫理や節約の倫理を身につけている必要があるのである。また、ヴェーバーの論理展開からいって、どちらか一方のみでは資本主義的産業経営は成立しないことになるであろう。

ところでアメリカにおいては、近年いわゆる新しい労働史研究が進められる中で、アメリカにおける工業化以前の労働者の中には、勤労の倫理は乏しかったことが明らかにされてきている⁽⁶⁴⁾。また、アメリカの18、19世紀の労働者について、勤勉・節約といった勤労倫理とは対極をなすと思われる、飲酒や過度の飲酒習慣についての研究を見ても、メリ

カの労働者に限っていえば、ヴェーバーがいう心理的起動力としての作用が働き、勤労倫理が十分に浸透しそれを実践した労働者が大量現象として見られたとは言えそうもないような事態が次第に明らかにされてきているのである。これらの研究で明らかにされてきている成果と、ヴェーバーの考え方を如何に整合的に理解していくべきであろうか。

またアメリカの場合、封建制そのものを欠いているという点を考えると、ヴェーバーの言うような「伝統主義的」なものの考え方がそもそも希薄であり、さらにアメリカに渡ってきた移民は伝統主義的束縛から決別するためにアメリカにやってきたと言っても過言ではないであろう。そうであればいっそうそうした点を考慮に入れて考察を進める必要があるように思われる。労働者の営利心と移民（特に移民労働者の中のプロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神）とを関連させて考えると、それらとアメリカ資本主義の成立をどのように関連させて理解すればよいのか。問題はより複雑になるように思われる。

また他方、企業家の『資本主義の精神』の方はどうであろうか。産業革命期前後におけるアメリカの企業家理念といえども忽然と現われたわけではなく、それ以前の企業家理念の継承の上に成り立っているといえよう。しかしながら、ここで移民企業家が重要な役割を担ったとすれば（もちろんすべてが移民企業家であるわけではないが、出自を辿ると2～3代前に移民してきた例は多く見られる）、その理念の継承関係はきわめて複雑なものにならざるを得ない。こうした企業家理念⁽⁶⁶⁾の起源を辿るためには、その移民企業家の母国での出自や宗教的背景にまで遡って考察することが是非とも必要となるであろう。

さらにこうした企業家理念や経営理念を問題とする場合、経済史と経営史との違いについても十分考慮しておく必要があるであろう。経済史研究と経営史研究に関連して、ヴェーバー・テーゼと大塚テーゼが日本の経済史・経営史研究にどのように受容され、あるいは受容されなかった場合、それはなぜ受容されなかったのか、または如何なる点が拒否されたのかという点を明らかにしておく必要があるであろう。本稿ではこの課題は検討し得なかったが、他日、別稿にて果たしたいと考えている。

【注】

- (1) 平出宣道『富と民衆——アメリカ資本主義史上の人々——』日本評論新社、1958年、第3章木綿工業の父と女工および豊原治郎「サミュエル・スレイター管見——アメリカ産業革命史抄——」『経済研究論集』（広島経済大学）、1988年、第1巻第2号、pp.5-24。参照。
- (2) アンドリュー・カーネギーについてはさしあたり、Louis M. Hacker, *The World of Andrew Carnegie 1865-1901*, N.Y. 1968. 小澤治郎訳『アンドリュウ・カーネギーの世界（上）・（下）』、嵯峨野書院、1971年および *Autobiography of Andrew Carnegie*, Boston and N.Y., 1920. 坂西志保訳『鉄鋼王カーネギー自伝』、角川文庫、1967年参照。
- (3) 19世紀前半の移民については、W. J. Bromwell, *History of Immigration to the United States 1819-1855*, N.Y., 1856 (repr., N.Y. 1969)。19世紀後半以後については、野村達朗「ヨーロッパ系移民の流入と世紀転換期の合衆国人口構成」、佐々木隆他編『100年前のアメリカ——世紀転換期のアメリカ社会と文化——』所収参照。なお、16・17世紀のイギリスからの移民は、非自発的移民、すなわち年季奉公人が多かった。川北稔『民衆の大英帝国——近世イギリス社会とアメリカ移民——』、岩波書店、1990年。
- (4) 19世紀初頭にアメリカにやってきたアイルランド人移民は、極めて劣悪な労働条件の下で運河などの建設労働に従事せざるを得ず、またそうした仕事を渡り歩き、各地で暴動を引き起こした。拙稿、『アメリカ南部の運河経営と移民労働者——19世紀前半チェサピーク・アンド・オハイオ運河の場合——』『社会経済史学』第54巻第6号 1989年参照。
- (5) 鈴木圭介編『アメリカ経済史Ⅰ』、東京大学出版会、1972年、p. 234。および岡田泰男・永田啓恭編『概説アメリカ経済史』、有斐閣、1983年、pp.57-58。産業革命期の主要産業である綿工業の主たる労働力供給源は農村の農民であったとされており、その意味でこの時期の移民は補充労働力であったとみなされている。
- (6) もちろん、ヴェーバーの資本主義の精神に関する叙述は、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に限られるものではなく、『経済史』や『世界諸宗教の経済倫理』などヴェーバーの比較宗教社会学の全体系を貫く一貫したテーマであり、諸著作の随所に見られるが、ここでは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に

限って言及するにとどめたい。

- (7) 中村勝巳『アメリカ資本主義論』, 未来社, 1971年, p.13. および同『アメリカ資本主義の成立』, 日本評論社, 1966年, 序 p.1.
- (8) 大塚久雄『大塚久雄著作集』, (以下, 『著作集』と略記), 岩波書店, 1969年, 第9巻, p.366.
- (9) 大塚氏は, 労働者も重要であることを随所で強調している。大塚久雄『著作集』, 第8巻, pp.21-23, 27, 61, 97など。また, 住谷一彦『マックス・ヴェーバー——現代への思想的視座——』(以後『視座』と略記), 日本放送協会, 昭和45年, pp.77-78も参照。
- (10) マックス・ヴェーバー, 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』, 岩波文庫, 1987年, p.20.
- (11) 同書, p.24. ヴェーバーは, 資本主義の精神としての天職観念(職業労働を神から与えられた使命としてそれを禁欲的に遂行するというような観念)は, 個々人の「幸福」や「利益」といったものとは対立する非合理的なものであり, 合理主義の発展からこうした観念が生まれたのではないことを指摘している。前掲訳書, pp.47-48および pp.91-94.
- (12) 同書, p.24-25.
- (13) 同書, p.91.
- (14) ヴェーバーは, この因果関係が北アメリカでも, ことにピューリタンのニューイングランドには明瞭に見て取れることを随所で指摘している。ヴェーバー, 前掲訳書, pp.25, 27-28, 32, 36, 45, 52, 321, 345-46, 348, 350など参照。
- (15) 同書, p.40.
- (16) この小冊子とは『若き tradesman への戒め』(An Advice to a Young Tradesman)である。この Tradesman を「商人」と翻訳することについて, 大塚氏は「問題の焦点を分からなくしてしまう」として原語のままにされている。『著作集』, 第8巻, p.38, 注(3)参照。住谷氏はこれを「職人」とされておられるが(住谷, 前掲『視座』, p.82), フランクリンは, いかなる人々にこの戒めを与えようとしたのであろうか。ヴェーバーは対象を「市民的中産身分の大衆」と表現している。ただし, 大塚訳には「明らかに使用人も含めて」という原文にはない語が挿入されている(大塚訳 p.58)。梶山・安藤訳では「ブルジョア的中産階級の大衆」となっている。梶山力訳, 安藤英治編『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』, 未来社,

1994年, p.103. (この注は安藤英治氏の翻訳された部分である)。

この小冊子書かれたのは18世紀中葉, 1748年(フランクリン著作年表, 松本・西川訳, 『フランクリン自伝』, 岩波書店, 1982年, 所収, p.2.)である。18世紀中葉のアメリカは北部植民地でさえ社会的分業が進展し始めた時期であり, 依然として半農半工の人々がほとんどであり, 職人とも商人とも言い難い人々をフランクリンは念頭においていたのではないであろうか。また, 封建制そのものが存在しなかったアメリカに限っていえば, アメリカの商人が伝統主義的な精神を持ち合わせていたヨーロッパの, いわゆる前期的商人と同列に論じられないことは当然であると思われる。

- (17) 前掲訳書, p.54. ヴェーバーはこうした伝統主義的精神の持ち主の中でも金銭欲への衝動にかられた例として, 「たとえば, 『金儲けのためには地獄へも船を乗り入れて, 帆の焼け焦げるのもかまわなかった』あのオランダの船長のように」という例をあげている。同書, 同頁。ちなみに, これはアムステルダムの商人ペイラントの言葉だとされている。大塚『著作集』, p.53.
- (18) 前掲訳書, p.85.
- (19) 同書, p.94.
- (20) 「ルッターの聖書翻訳以前には, ドイツ語の《Beruf》, オランダ語の《beroep》英語の《calling》……などの語は, どの国でも, 現在のような世俗的な意味には決して使用されていない。」前掲訳書, p.101. 注(3)参照。
- (21) 同書, p.95.
- (22) 同書, p.110.
- (23) 同書, p.122.
- (24) 同書, p.125.
- (25) 同書, p.144. ここでヴェーバーは, 考察の対象としているのはカルヴァン自身の見解ではなくカルヴィニズムであることに注意を促している。同書, p.150.
- (26) 同書, p.152.
- (27) 同書, p.157.
- (28) 同書, pp.165-6.
- (29) 同書, p.166.
- (30) 同書, p.173.
- (31) 同書, p.179.

- (32) 「『純粹培養的』に考察することが何よりもまず必要だった」と述べている。前掲訳書, p.217.
- (33) 同書, pp.216-85.
- (34) 同書, p.286.
- (35) 同書, p.342.
- (36) 同書, pp.344-5.
- (37) 注⑩参照。
- (38) ヴェーバー『プロ倫』の中で、資本主義の精神が典型的に述べられているとしてあげられているフランクリンの小冊子が発行されたのが18世紀中葉であることが一つの傍証となるように思われるが、しかし、むしろ重要なのは、ヴェーバーがいつまでをその対象となる時期と考えていたのか、その終期の方が問題であるように思われる。終期は産業革命の前までということになるのであろうか。
- (39) ヴェーバーは「ピュウリタンのニューイングランド植民地と、それからカトリックのメリーランド、監督教会の南部地方、諸教会派の混在したロード・アイランド」と述べている。前掲訳書, p.36. また、本稿注⑩も参照。
- (40) 中村勝巳氏は、「それぞれの地域内にある段階までは、異なる二つの資本が存在し対立していた」と述べ、それぞれの植民地の中にも二つの異なる資本類型が存在し、かつ相互に対抗関係にあったことを如何に捉えるかが重要であることを指摘しておられる。中村、前掲『成立』, p.15 参照。
- (41) この問題は、いわゆる「商業資本の産業資本の転化」を資本主義形成の中心線と見るか、あるいは「中産的生産者層の両極分解」を資本主義形成の中心線と見るかという日本の学会の中で長きにわたって議論が展開されてきたが未だ結論を見ていないきわめて重要な問題である。また、この問題の結論を見ないまま、否むしろその結論を避ける形で、経営史学会という新しい学会および経営史という新しい学問領域が形成されていったら言い過ぎであろうか。
- (42) 『前掲訳書』, pp.356, 363. ヴェーバーは、資本主義の経済主体として企業家と労働者の両方をあげ、「それが個々人のなかでばらばらではなく、人間の集団によって抱かれたものの方の見方として成立していなければならない。」とも述べている。同書, pp.51-52.
- (43) ヴェーバーは、「近代独自の資本主義『精神』が大量現象として出現する」ことが重要であると述べている。前掲訳書, p.54.

- (44) これに類するゾンバルト・ブレンターノに関する注釈（批判の注釈も含めて）はきわめて多くの頁に見られるが、とりわけ前掲訳書、pp.25-26の注(3)、pp.34-5の注(4)、pp.45-6の注(2)(3)、pp.49-50の注(3)(5)、pp.56-63の注(1)(2)(3)、pp.85-91の注(1)、pp.142の注(3)、pp.294-98の注(1)(4)(7)(11)、pp.341-2の注(5)などを参照。
- (45) 同書、p.363。
- (46) 住谷氏は、ヴェーバーが「尠大な人口タンクを基盤に、低賃金を楨杆とした資本主義的發展の可能なことを十分認め」た上で、なおかつ帝制ドイツの現実を踏まえ、「ブルジョア化の推進力たり得なかったことに、(ヴェーバーは一引用者)終生鋭く批判的であった。」と述べておられる。住谷一彦「GDSの編纂者としてのヴェーバー」(以後、「GDS論文」と略記)、大塚久雄・安藤英治・内田芳明・住谷一彦著「マックス・ヴェーバー研究」、岩波書店、昭和40年、p.216、また同氏は、ヴェーバーが1909年に発表した論文「工業労働の心理物理学」が「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の質労働論的側面を持つものであり、それによって「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」は「『資本主義の精神』論の論旨を補完」されたと述べておられる。同書、p.213。なお、同書、p.217注(12)も参照。
- (47) 大塚久雄、「マックス・ヴェーバーにおける資本主義の『精神』」、『著作集』、第8巻、p.3
- (48) 同書、同頁。
- (49) 同書、pp.7-8。ブレンターノが「きわめて事もなげに」Kapitalistischer Geistという述語を慣用しているのに対して、ヴェーバーは「頑なとさえ思われる態度で」《Geist》des Kapitalismusないし Geist des (modernen) Kapitalismusという表現を用い、ブレンターノと同じ表現を用いる場合にも「注意深く」「つねにここで用いられるような語義で」というふうに注記している」ことを指摘している。また、「誤読や誤解」の上に立つものうち日本の研究者によるものとして、土屋喬雄「日本経営理念史」、昭和39年、日本経済新聞社をあげている。
- (50) 大塚『著作集』、第8巻（以下巻数省略）、p.9。
- (51) 同、pp.14-17。
- (52) 大塚氏の理解がヴェーバーの叙述を正確にフォローしていることは前注(42)および注(44)を参照。
- (53) 大塚『著作集』、p.27。また、「貨幣利得を算定し期待する心的態

度」とも表現されている。大塚, 同頁。なお, 住谷氏の前掲論文の中には, ヴェーバーにおける「資本主義の精神」は「資本家層のエートスだけではなく, またすぐれて労働者層のエートスでもあったことを思うべきである。……生産力論の視点からいえば, 資本家層と労働者層とのあいだに共通の利害関係状況 Interessenlage を指向する生活態度があらかじめ形成されていなければ近代的産業経営体の建設は現実にも可能でもなかった」との指摘がある。住谷前掲「GDS 論文」p. 215。なお, 大塚氏はこの第一の点に関して, 「『論争』史の上で, ほとんど正当な関心を払われないまま今日にいたっている」と述べているが(大塚, 同, p.30), 大塚氏のこの論文が執筆された1964年から65年以後今日にいたるまで, 氏の指摘を覆すに十分な研究が進んでいるようには思われない。

- (54) 大塚『著作集』, p.27. この点で土屋氏の前掲書は「とんでもない誤解だということが分かるであろう」と痛烈に批判している。大塚, 同, p.30. ちなみに土屋氏の表現は次のようになっている。「まずこの問題(ヴェーバーのいうところの『資本主義の精神』—引用者)に関し研究した学者は, ルヨ・ブレンターノで, 彼によれば, 資本主義精神とは無限なる営利欲である。」とされている。土屋, 前掲書, p. 33.
- (55) 大塚『著作集』, pp.33-4. ブレンターノのヴェーバー批判は, 中世の商業都市に資本主義の発達は見られたのに, 営利欲がまだ倫理的な色彩をもつ生活の原則にまで聖化されていないということのために, 資本主義の精神は存在しなかったということになり, 現代においては, 営利を倫理的義務とは考えていないということのために, 資本主義時代と呼ばれる現代にも資本主義の精神は存在しないという奇妙なことになる, というものである。大塚氏は「誤解をおそれずに, ずばりと言いきってしまうならば」として「小ブルジョア層の精神なのである。また, そうであるからこそ, 『資本主義の精神』は近代資本主義に先立って誕生し, 存在したということにもなるのである。」と述べている。同, 『著作集』, p.35.
- (56) 大塚, 『著作集』, p.43. ここでは, そうした諸徳性が単なる理念としてではなく, 「心理的起動力」をもつ現実的な力として作用することが重要であることを大塚氏が強調されていると理解して良いであろう。ヴェーバーはフランクリンのこの小冊子は当時教育的読み物として利用されていたと述べている(前掲訳書 p.62)が, 当時のアメリ

カの中産階級の識字率はどの程度であったかが問題となるのではないだろうか。また、広く読まれたということから、そうした理念を実行した人が「大量現象」として多数見い出されるということには直接的には結びつかないように思われる。

- (57) 大塚、『著作集』, p.44. 住谷氏は「営業のための道徳から道徳のための営業への転換」と表現されている。住谷, 前掲『視座』, p.82. それゆえ、「現銀安売掛値なし」は「資本主義の精神」ではないと、土屋氏は批判されることになる。『著作集』同頁。『視座』p.82.
- (58) 大塚、『著作集』, pp.56-7.
- (59) 同書, p.62.
- (60) 同書, p.67.
- (61) 同書, pp.80-1.
- (62) 同書 pp.86-7.
- (63) 新しい労働史研究の動向については、野村達朗、「アメリカ労働者階級史研究における新動向」『愛知県立外国学部紀要』第10号, 1977年, pp.134-65. および同「アメリカ労働史研究の新しい潮流」『歴史評論』, 341号, 1978年9月, 44-55. また、大塚秀之「アメリカ合衆国における資本＝賃労働の歴史的展開をめぐる予備的考察」『研究年報』(神戸市外国語大学外国学研究所), 2号, 1983年, pp.1-47も参照。
- (64) Herbert G. Gutman, *Work, Culture, and Society in Industrializing America: Essays in American Working-Class and Social History*. 大下・野村・長田・竹田訳『金びか時代のアメリカ』, 平凡社, 1986年。ガットマンは、1815～43年の時期のアメリカ社会は「まだすぐれて前工業的な社会」であったとしている。同書, pp.17, 27. この点は日本のアメリカ経済史研究の通説と異なることに注意を払う必要がある。
- (65) 岡本勝『アメリカ禁酒運動の軌跡——植民地時代から全国禁酒法まで——』, ミネルヴァ書房, 1994年。特に本書第1章および2章を参照。
- (66) 企業家理念については、さしあたり次の文献を参照。竹中靖一・宮本又次監修『経営理念の国際比較——その国際比較——』, 東洋文化社, 1979年; 中川敬一郎『比較経営史序説』, 東京大学出版会, 1981年; 間宏「日本における産業化初期の経営理念——国際比較の理論的枠組みを求めて——」, 『経営史学』第25巻第2号, pp.1-32など。

なお、産業化初期の企業家理念は、経営理念と経営思想とを必ずしもはっきりと区別できない。

Annotated Notes on Protestant Ethics and American Capitalism

Fumiaki HAMA

Max Weber was first to propose that a relationship existed between Protestant ethics and the formation of capitalism. This paper begins with a summary of the Japanese version of “Protestant Ethics and the Spirit of Capitalism” (“Die protestantische Ethics und der »Geist« des Kapitalismus”, translated by H. Otsuka) and examined some interesting issues related to the formation of the American capitalism. In second part, the the highly-regarded translator Otsuka’s “The spirit of capitalism of Max Weber” was summarized with a discussion of key points.